

第 34 回日本分子生物学会年会
男女共同参画ランチョンワークショップ
<全員参加の生命科学研究を目指して>

日時：2011 年 12 月 13 日（火）12:15～13:45

会場：パシフィコ横浜 第 4 会場（会議センター3 階・303）

企画：日本分子生物学会 男女共同参画委員会

○お時間になりましたので、お食事続けながら耳を傾けてください。本日はご参集くださりましてありがとうございます。分子生物学会の男女共同参画ランチョンワークショップの 11 回目になります。11 回目を迎えます、これまでのあり方を振り返りながら、この先、分子生物学会としてはどうやって取り組んでいくのかを考えていこうという企画です。

ですので、最初に福島県立医科大学の本間先生から、これまでの 10 年間、分子生物学会では男女共同参画に関してどのように取り組んできて、どのような成果を上げてきたかを簡単にご紹介いただきます。それを踏まえまして、次の第 2 部で慶應大学の塩見先生に、現状、意識改革がどう必要かをお話しいたします。第 3 部は、クリッカーをお手元にお持ちだと思いますが、それを使いまして皆さまのご意見を伺いながら、実際にどのように考えていったら良いかを考えていきたいと思えます。初めに本間先生に、これまでの男女共同参画の取組みと成果ということでお話しいたします。よろしく願いいたします。

第 1 部 講演

「これまでの男女共同参画の取組みと成果」

本間 美和子（福島県立医科大学）[（スライド資料）](#)

○本間と申します。本日はこのような機会をいただきましてありがとうございます。ただいまの後藤委員長のご紹介を受けまして、分子生物学会における男女共同参画の取組みという視点から、この 10 年間の歩みについて簡単にまとめてお話ししたいと思いますので、10 分ほどのお時間をちょうだいさせていただきます。

こちらに概要をお示しますが、本日のこのランチョン企画のような、教育的または啓蒙的な企画もずっと行われてきました。それと同時に、データを収集し、女性研究者の実態について現状を知る。そのデータを集めたあとに、それを基に提言あるいは要望という文書を作成することにより政策に反映させるという活動が非常に大事なことであると認識しなければいけないと思えますので、紹介させていただきます。その活動の一環として、分子生物学会が他学会に先駆けて「属性調査」を 2009 年から始めて、そこから浮かび上が

ってきた課題がございます。それについても後半の部分で説明させていただきたいと思っております。

こちらに、これまでの分子生物学会として取り組んだ内容について、時系列に即してリストアップさせていただきました。まず、2001年に、女性研究者の学会参加を促すという意味で年会開催時の保育室の設置を目的とする、ワーキンググループとしての男女共同参画に関連する活動が始まりました。この時代背景としましては、1999年に男女共同参画社会基本法が、2001年に男女共同参画基本計画が世の中に出されました。それを受けまして、2002年には、学会同士が連携して声を上げることが必要であろうということで、男女共同参画学協会連絡会設立ワーキンググループに分子生物学会も参加いたしました。この男女共同参画学協会連絡会は2002年に設立されました。現在は、正式加盟学会とオブザーバー学会を含めまして67程の学協会が加盟する大きな団体となっております。

それに引き続きまして、さっそく女性研究者の実態調査を目的とする、大規模アンケート調査のためのワーキングが2005年に始まりまして、これはその後の第2回調査にもつながっていきます。例えば女性研究者ならではの子育てというハードルがある、そこを支援するための取組みが必要であるという提言を、ここで得られたデータに基づいて次々に行いました。ここに示すような提言あるいは要望を出していくこととなります。さらに、学会企画としての「第1回女子中高生 夏の学校」も分子生物学会が協力的にサポートすることで始まりました。また、これらの結果を踏まえて、実際にどういう数値目標を設定したらいいかという提言をいたしまして、第3期科学技術基本計画においては女性研究者比率を25%まで引き上げようという「数値目標」が実際に載るといふ盛り込まれ方もされるようになっております。

こちら側にこれらの活動を協力的に推進されました先生方のお名前を挙げておりますが、ワーキンググループとしての活動が、2006年に初めて委員会に昇格しました。そして、この年から、実際に女性研究者を支援するための大学における環境整備を中心に、北大、東北大、東大、京大をはじめとする、文部科学省女性研究者モデル事業が開始されるという時代背景になります。

ここまでは女性研究者の裾野を広げるという観点から、子育て、あるいはそういうハードルを抱える人たちがなるべく研究に参加する、あるいは学会に参加するための支援を行うという活動であったわけですが、この辺りからは例えば次世代教育という観点から「第1回女子中高生 関西科学塾」と他に先駆けて開始することも行われました。女子中高生の理系進路選択事業も始まることになったわけです。

次々に具体的な数値目標を掲げながら、要望・提言活動が行われました。モデル事業加速プログラムという研究者支援の次のプログラムに対する提言活動。2009年には、いわゆる事業仕分けで「女性研究者に対する共同参画事業はもういいのではないか」という声が上がったときに、やはり継続的に続けるべきであるということで、特に「第4

期基本計画、第 3 次共同参画基本計画への意見集約」というすばらしい要望書が提出されています。

最初にお話ししましたように、分子生物学会では属性調査を 2009 年から始めました。今までは裾野を広げるという観点であったわけですが、この辺りからワーク・ライフ・バランス、研究者としての生き方に踏み込んだ意識の問題に触れるような提言が出てきました。さらにリーダーシップの育成という観点から、意思決定の場に女性がいなければならないだろうということでリーダーシップという言葉がだんだん意識されるようになってきました。そういう背景と属性調査の結果を受けて浮き上がってきたものについては、後ほど説明させていただきたいと思います。

このように、国の政策と関連させまして分子生物学会の取組みを横に並べて示しております。多くの研究者の先生方が分子生物学会という看板を背負ってボランティアワークとしていろいろな活動をしてくださり、そうしたことが今につながっていることを改めて認識するような次第です。

特に復帰支援ということでは、RPD 採用者における会員比率についてのデータをお示します。人文科学系を含む複数の分野がございますが、理工系の 5 分野に限ったデータを実数としてお示します。その中で分子生物学会の会員比はこのようなパーセンテージを占めていることをご紹介します。

次に、後半の属性調査の結果です。こちらにお示しますように、2009 年から経年的に分子生物学会の年会発表者ならびにシンポジウムスピーカーにおける女性比率を調査しております。分子生物学会に占める女性会員割合は 24.8%であるのに対して、シンポジウムのオーガナイザーあるいはスピーカーの割合は、ここに示すような数字であるということになります。結構いるじゃないかという見方もできるかと思います。しかし、これを客観的に複数の学会で比較する必要があるだろうと、昨年から学協会連絡会の中にリーダーシップという観点からワーキンググループが立ち上がりました。私もその際にメンバーとして参加させていただきました。

このグラフでは、複数の学会について、会員の中に占める女性比率を青、シンポジウムスピーカーの女性比率を赤、オーガナイザーの女性比率を緑で示しております。一目瞭然でございますが、発表者またはオーガナイザー等のリーダー的女性の比率は学会ごとに異なります。では、分子生物学会はどこにいるのだろうと見てみますと、このようになります。(会場より声が沸く) これは 2010 年のデータですが、このように複数の学会ごとの結果を比較検討してみて、驚くべきことに最下位という結果が得られました。

こういう結果を見ると、実態をきちんと認識することは本当に大事だと思います。それと同時に、昨年まとめた、学会賞・奨励賞受賞者の女性比率を調べた結果をお示します。これは日本植物生理学会のデータです。青のバーが審査員、その中の赤が女性審査員の数を示しています。ここで示しますように、女性審査員が登場したあとに、紫または薄い赤で見られるような女性の受賞者が初めて誕生したという結果が得られました。つまり、意

思決定の場に女性がいるか否かが、評価の場においても大変重要である事を示しております。

同様の結果は、海外の American Physical Society (米国生理学会) でも得られています。詳しい説明は割愛させていただきますが、女性のコミッティーメンバー (委員) あるいはチェア (議長) が出ることによって、女性の採択率が劇的に上昇するというデータがございます。

学会のリーダーシップ活動については、ヴィジブルな女性比率をどのように上げるかを示唆する一つの結果をご紹介します。こちらは日本植物生理学会のデータで、シンポジウムの発表者に占める女性比率は、男性だけのオーガナイザーの場合よりも女性が 1 人でも入ったセッションのほうが格段に増えることが浮き上がってきます。

以上の結果から、ヴィジブルな女性研究者比率を上げることがリーダーシップ活動につながっていきますので、今後はこういったところに注力する必要があるかと思えます。なぜ低いかという理由として大事なポイントは、女性が選ぶ側にいないと無意識のバイアスがあることによって女性が選ばれにくいという現実があることが浮き彫りにされてきました。そのことから、主催者側により多くの女性を登場させる。また、こうした無意識のバイアスがあることに気づくことが出発点になるのではないかと考えます。

ちょっと長くなりましたが、このように文部科学省あるいは総合科学技術会議をはじめとするいろいろな支援により、大学における環境整備が次々と進められ、大学また個人レベルの支援制度が進められています。一方、こうした学会における活動では、意識改革を含めた中身を支援することが非常に重要で、こうしたことが双方向性に相乗効果を生むことによって学会で認められ、また組織・機関でも認められることになるのではないかと考えます。

これは、2002 年からの分子生物学会年会企画のタイトルをリストアップしたものです。ここに見られますように、その時代を反映してどのような取組みを目指していくかを見ますと、女性の裾野を広げようというところから、研究者としての中身の意識改革、あるいはリーダーを増やすというところにだんだんと視点が変わっていることが見られて非常におもしろいのではないかと思います。本日のタイトルは、この「全員参加の生命科学研究を目指して」です。

もう一つ付け加えますと、皆さんに参加していただいているいろいろな実態データを集めることが、こうした活動を支え、また政策に反映されることになっています。これからもどうぞご支援のほどよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

第 2 部 講演

「意識改革の必要性について」

塩見 春彦 (慶應大学) [\(スライド資料\)](#)

○塩見です。先ほど、本間先生の最後のほうに出てきました無意識のバイアスに関して話を続けていきたいと思います。今年9月に、こういう論文が“Nature”に出されました。これは非常に大きな反響と、言ってみれば物議を醸しているわけです。なぜそういうことが起こっているかといいますと、この論文ではおもしろおかしくは書いてあるのですが、内容は「男は家庭のことはできないけれども、外でちゃんと宇宙のことを考えられる、ウイルスの構造に関する本が読める」ということが書いてあります。つまり、男というのは外に出て狩りをする、ハントする、そして女はものを集める。そういう典型的なステレオタイプが書いてあります。

現在に至るまで、この論文に対する反響がどんどん更新されています。“Nature”のサイトをぜひ読んでもらいたいと思います。そこには、「2011年という、この時代にこんな論文が出てくるのは信じられない。この論文をハンドリングしたエディターを辞めさせろ」というコメントがたくさん出てきます。「“Nature”がこういう論文を出すというのは、よく言われているようにレビュープロセスがおかしいのではないか。誰がレビューしているのか。しかも、“Nature”はこういう論文を出すことによって、男と女は違うんだというバカげたアイデアをプロモーションしているのではないか。これは一見、冗談に名を借りたようになっているけれども、実は明らかなセクシストのアイデアを書いてある」。ぜひ読んでもらいたいと思います。

もう一つ私が気づいた問題は、こういうコメントがそのサイトにたくさん出てきているのですが、日本からのコメントは一つもありません。つまり日本の人は、女性も含めて、こういうことに反応するという意識がひどく低いということです。ここで私が最も重要だと思うのは、この人はそれが問題だということをあまり意識せずにこの論文を書いている。しかも、その論文をハンドリングしたエディターも、おそらく、それが問題になることを意識していないということだと思います。

ここから言えることは、男と女は生まれながら違うんだという意識がいまだに、アメリカでも、この人はたしかオーストラリアの人ですが、そういうところでも深く根強く残っている。ジェンダーバイアスとか、男と女の違いという典型的なステレオタイプが、私たちの意識の中に深く根強く残っていることを浮き彫りにした論文だと思います。つまり、故意ではない、何気ない、潜在的な意識の先入観みたいなものを私たちは常に持っている。「男はこうだ、女はこうだ」という意識が今でもある。ここに典型的なことが書いてありますが、男はハンター、女は集める人みたいなことです。

こういう潜在意識の中に隠れていることは、優位にある人たちが心地よく思いたい。この場合の多くは男性側ですが、私たちのほうが上にあるという意識があるのではないかということ、この論文が実は明らかにしてくれるわけです。

したがって、私たちのコミュニティーが取り組んでいかなければならない重要な問題は、私たち個々人が持っている、このような偏見を認めて、それを乗り越える。それを明らか

にして、認識して、おおげさに言うのと戦っていくことが、私たちの社会、またコミュニティーの利益になっていくだろう。

同じようなことですが、もう一つ重要なポイントは、こういうことをディスカッションするときに、多くの人がしばしば「退行」してしまう。劣化する、または攻撃的になる、下品になる、客観性を失っていくことです。これはネットの掲示板みたいなもので、匿名性とか匿名である自由を謳歌するときに人々がよく陥るところです。それはなぜだろうか。

それは、私たちは科学者であるにもかかわらず、男女の問題を扱うときに科学的なものの考え方を失ってしまうことがしばしばある。こういう問題に関しても、普段私たちが実験・研究をやっているような考え方をそのまま当てはめていけば問題ないにもかかわらず、潜在的なバイアスを含めて考えてしまう。「女の人は」、また「男は」とすぐに一般化してしまう。個々人、つまり同僚を同僚として認めずに、男か女かというバイアスで判断することがしばしばである。

したがって、私たちが考えて実践していかなければならないことは、このように横行している科学的根拠のないバイアスを「理性的・意識的に排除」していく必要があるだろう。当たり前のことです。だから、普通に科学的な考え方をしていけば、それは全然難しいことではないはずです。

具体的にどういうところにそのバイアスが潜んでいるかを、いくつか例を挙げて考えてみたいと思います。例えば「女性は使いにくいよね」とか「女性って大変でしょ？」と言う人がPIの中にもたくさんおられると思います。女性のPIの中にもおられるかもしれません。そういう場合、これはすべての女性のことを言っているのか、それとも誰かを対象にしているのか。私たちはやはり一般化するのではなくて、必ず同僚として見ていく必要があるだろうと思います。

2点目、これはお医者さんがおられたら申し訳ないのですが、こういうことを言うことがよくあります。これは、名前は出しませんが、僕の友だちが言っていました。この場合も、女性とか、すべての医者・研究者というふうにバイアスがあるわけです。また、ステレオタイプを出している。

この場合に重要なことは、「降りる」ということは就職とか昇進が難しいから結婚して生活を安定させようとしているのか。お医者さんは資格ですが、主婦とか家事手伝いは資格なのか。または、夫の出世で自らも偉くなったと感じる。こういうことは個々の人にインタビューしていったら違っているはずですが、仕事を続けられない不完全燃焼感を必ず持つておられる。したがって、専業主婦なんていうものは世の中に存在しないと僕は思いたいと思います。

最後に、女性の中にもこういう意識の人がいます。「彼は家事・育児に協力的なので、これからも助けてもらいながら、頑張っていきたいです」みたいな、そういうことを言う女性がいます。これは明らかにおかしい。それは自分のパートナーを対等だと思っていない、

または、こういうことを男性の優しさに期待することは明らかに間違っているのではないか。つまり、同僚またはパートナーとして認識していく必要があると思っています。

ここでは、同じことを漫画で言っています。家庭を持っている女性が、そのパートナーから言われて最もカチンと来る言葉は、これだそうです。「手伝おうか」。手伝おうかじゃない、一緒にやりましょうということです。または、「おい、アレ、やっておけと言っただろ」じゃなくて、自分でやれよということです。この場合、お互いが仕事を持ってお互いが同じ方向を向いているのだったら、それはやはり同僚であるはずですが、どこかに隠れている、潜在的なバイアスが存在しているから、こういう言葉が出てくる。「私はあなたのお母さんじゃない」と。

まさにこういうことを斎藤環という人が言っています。「自らを客観視する視点を失うと、世界に自分と相手の 2 者関係しか存在していないかのような錯覚がもたらされる。そしてほとんどの 3 者関係は、その起源である母親と子供の 2 者関係に限りなく近づいていく」。こういうことを常に考えていく必要があると思います。ここで重要なことは、別に難しいことではなくて、私たちがサイエンスをやるようにこういうことを考えていくことではないか。

最後ですが、1970 年代に“Glass ceiling”という言葉がつけられました。2000 年代になると“Leaking pipeline”、ほかの分野では女性の進出がどんどん進んできたにもかかわらず、サイエンスの分野では学生の半数近くが女性になってきたが、アシスタント、アソシエイト、フルプロフェッサーになるにしたがってどんどん女性の数が減っていく。どこかで漏れていってしまうという意味です。今、この分野の言葉はこれだと思います。”Walking on eggshells”、卵の殻の上を歩くように慎重に歩きましょう。特に男性がこういう問題を考える場合にとということです。慎重にとというのは、そんなことを言っていたら何も言えなくなるのではないかということではありません。単に、私たちが実践している科学的な考え方をそこへ持ち込んでいただければ、全然問題がない。つまり、そういう科学的根拠のないバイアスを「理性的・意識的に排除する」、そういう意識を持つことが、この慎重に歩くということにつながると思います。以上です。

第 3 部 聴衆参加型ワークショップ 全員参加の生命科学研究を目指して

○第 1 部、2 部の講演から、無意識のバイアス、ステレオタイプ化が浮かび上がってきたかと思っています。私たちの中にそういうものが存在するかどうかを問うてみるのもおもしろいかと思っています。私自身は、バイアスはないとか、あったとしても認めないでやって来た気がしますが、掘ってみると意外と気づかずにあるのかもしれない。

そこで、第 3 部の聴衆参加型のワークショップに移りたいと思います。

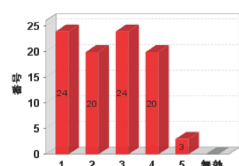
問 1. あなたの年齢は？

問 2. あなたの性別は？

問 3. あなたの立場は？

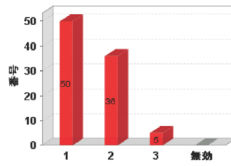
問 1. あなたの年齢は？

- 1. 20代
- 2. 30代
- 3. 40代
- 4. 50代以上
- 5. わからない



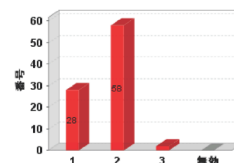
問 2. あなたの性別は？

- 1. 女性
- 2. 男性
- 3. わからない



問 3. あなたの立場は？

- 1. PI(ラボの主宰者)
- 2. PI以外
- 3. わからない

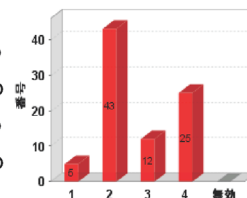


問 4. 「日本には男女別の役割分担という美しい文化がある」という発言について、どう思いますか？

○結果は、女性回答者では「抵抗がある」という方が非常に多く、男性でもやはり「抵抗がある」という方のほうが多かったですね。私自身は、男女差別ではなくて「男女区別」という言葉が本当はあってもいいのかなとは思いますが、非常に難しい問題だと思います。

問4. 「日本には男女別の役割分担という美しい文化がある」という発言について、どう思いますか？

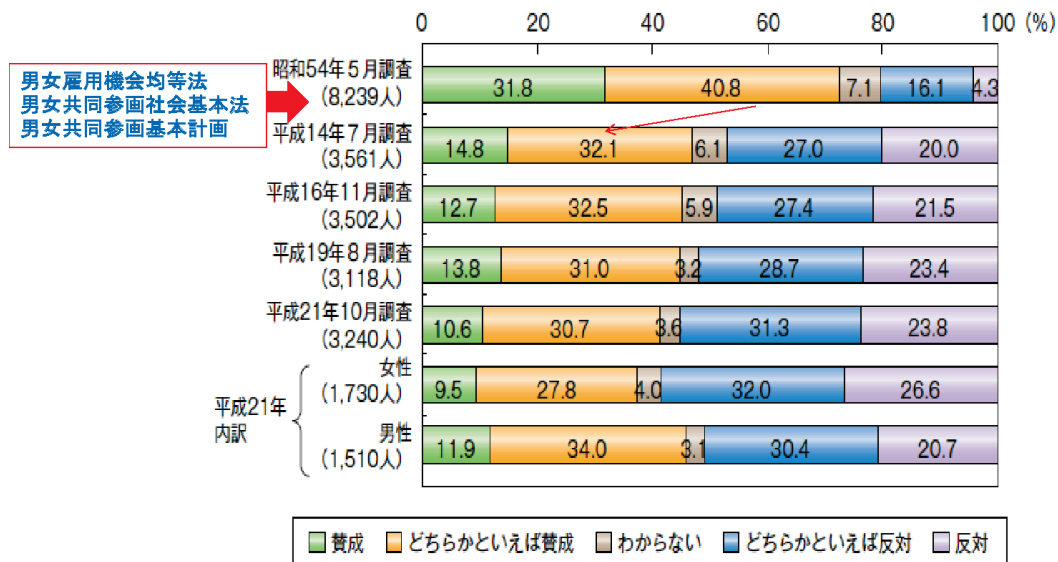
- 1. (女性回答者)同感である
- 2. (女性回答者)抵抗がある
- 3. (男性回答者)同感である
- 4. (男性回答者)抵抗がある



社会における男女共同参画意識の変化をご覧くださいとおわかりだと思います。一番上

社会における男女共同参画意識の変化

第20図 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」といった考え方について (性別)



の昭和 54 年のデータと、下から 3 つ目の平成 21 年のデータを見ていただきますと、昭和 54 年には大体 70%以上の方が「妻は家庭を守るべきである。男性は外で働く」という考えをしていましたが、平成 21 年になりますと大体 40%ぐらいに減少しています。平成 21 年の場合には女性と男性に分けた結果が出ておりますが、やや男性のほうがまだ「妻は家庭に」と思っている方が多い。やはり私としては、ここは「妻が守るべき」ではなくて 2 人で守ろうというのが正しいのではないかと考えます。

○若い人、例えば 18 歳の、大学に入学してきた男の子でも「妻には家にいて欲しい」という男の子がいます。それは、そういうふうで育てられたとしか言いようがないのですが、お互いを同格のパートナーとして見ていないという意識が、今の若い人にも根強く残っている。それをどうすればいいかというわけでもないのですが、そういうところがやはり先ほどから何回か出てきている、無意識のバイアスとかステレオタイプが今でも根強く残っているということだと思います。

問 5. 「6ヶ月前に子供が生まれた同じ研究室の女性ポスドクMさんが、夕方 5 時 30 分に帰宅準備を始めました。どう思いますか？」。

問 6. 「6ヶ月前に子供が生まれた同じ研究室の男性ポスドクKさんが、夕方 5 時 30 分に帰宅準備を始めました。どう思いますか？」

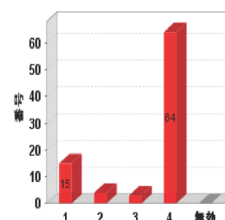
○選択肢のどれにも当てはまらないという気持ちを持ったときには、投票をしないか、それでも、一番近いと思われるところに投票をお願いします。気づかれた方が多いと思いますが、第 5 問と第 6 問で変わっているのは主人公が男性か女性かということです。第 5 問よりも増えた項目は「いいパパなんだね」

が増えました。また、「奥さんか子供の調子が悪いの？」も増えました。「何とも思わない」人が多いことはいいことかもしれませんが、女性が 5 時 30 分、子供を迎えに行くために帰ることには理解があっても、男性がやるとむしろすごくいいことをしていると受け取られたり、何か普段と違うことがあるのかなと思われたりします。

先ほどのお話にあったと思いますが、男性か女性か、主人公が変わるだけで、皆さんこれだけ気持ちが変わってくるというところですね。それに皆さんが気づかれているのかどうか。その辺をやはり意識していただきたいと思います。

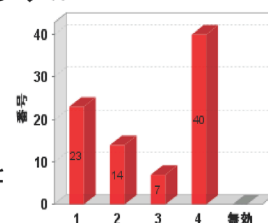
問 5. 6ヶ月前に子供が生まれた同じ研究室の女性ポスドクMさんが、夕方 5 時 30 分に帰宅準備を始めました。どう思いますか？

1. いいママなんだね
2. 旦那さんか子供の調子が悪いの？
3. 子供が出来たんだからもう少し仕事を頑張らないと
4. 何とも思わない



問 6. 6ヶ月前に子供が生まれた同じ研究室の男性ポスドクKさんが、夕方 5 時 30 分に帰宅準備を始めました。どう思いますか？

1. いいパパなんだね
2. 奥さんか子供の調子が悪いの？
3. 子供が出来たんだからもう少し仕事を頑張らないと
4. 何とも思わない



このような設問にしたのは、最近、女性に対するそういう理解は深まっているのですが、同じことを男性がしようとするすると周りからすごく抵抗されることがむしろ問題になってきています。女性が社会に進出するためには、逆に男性は家庭に参加しなければいけないわけです。それが両輪でないと、男女共同参画は成り立たないことです。その辺、皆さん、意識が変わることがよくおわかりになったと思います。そのようなことに気を付けていただきたいと思います。

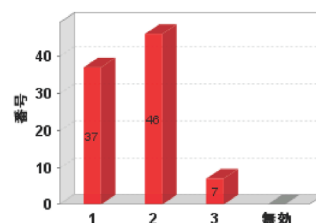
問 7. 「進路選択の際に、性別を理由にアドバイスを受けた事がありますか？」

○これは、指導の先生以外にも親御さんとか周囲の方、いろいろな方を含めてお答えいただければと思います。

「ある」と「ない」がちよっと接近していますね。35 から 45% ぐらいの間、「ない」が若干多いような気がいたしますが、実際に性別による進路選択のアドバイスがあったことをはっきり示すデータだと思えます。第1部の講演でも少しだけお話ししましたが、科学技術系分野の女性研究者の比率で平成22年度の内閣府のデータ（外国に比べ日本は、研究者の女性比率が低い）をお示しします。ここ

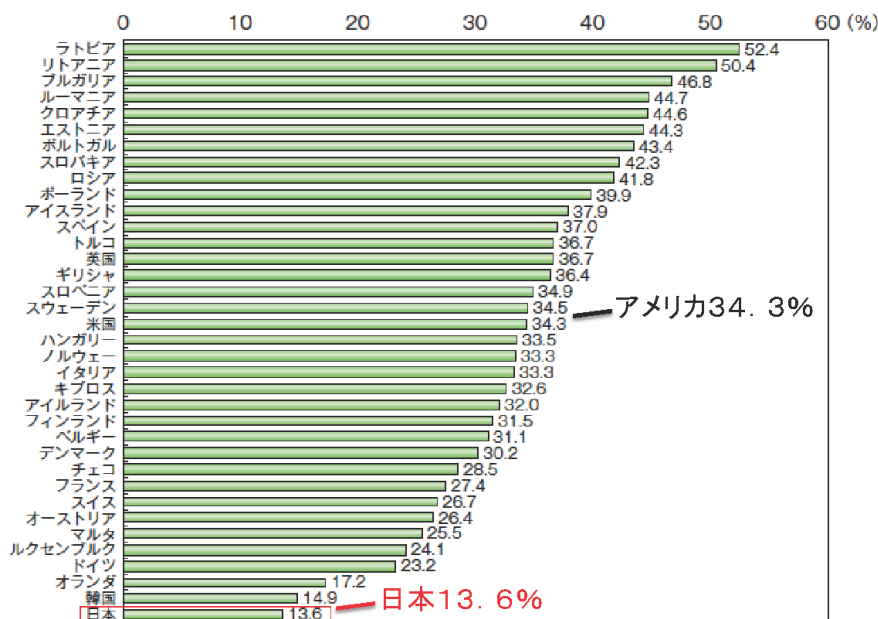
問7. 進路選択の際に、性別を理由にアドバイスを受けた事がありますか？

- 1. ある
- 2. ない
- 3. わからない



外国に比べ日本は、研究者の女性比率が低い

1 研究者に占める女性割合の国際比較 (科学技術系分野)



(備考) 1. EU諸国等の値は、E U「Eurostat」より作成。推定値、暫定値を含む。アイスランド、スロバキア、ロシア、チェコは2008 (平成20) 年。イタリア、フランスは2006 (平成18) 年。ギリシャは2005 (平成17) 年。スイスは2004 (平成16) 年。オランダは2003 (平成15) 年。他の国は2007 (平成19) 年時点。
2. 日本の数値は、総務省「平成22年科学技術研究調査報告」に基づく (2010 (平成22) 年3月31日現在)。

にご覧いただけますように、先進諸国の中で日本は最下位、13.6%となっております。こうしたデータを見ますと、やはり女性研究者を増やすためには、次世代の、中学・高校あるいは小学生のうちから研究に進む人たちを増やす、理系選択を増やすことがいかに重要であるかに気づかされるわけです。

○多分、私たちがやらなければならないことの重要な一つは、若い人たちに自然科学的なものの考え方を身につけさせる、それは別に女性、男性というわけではなくて、今、理科離れが叫ばれていますが、そういう考え方をぜひ学んでもらいたい。それに積極的に関わっていく必要があるかと思えます。例えば今回の地震とか津波、原発事故のことを考えても、いかに私たちが危うい上を歩いていたかがわかると思えます。それと、おおげさに言う科学にデータを解析できるような人をどれだけ育てられるかによって、今後の明るい未来があるか、それとも同じ失敗を繰り返すかが決まってくるのではないかと私は思います。

問 8. 「女性の理系選択を促すために有効と考えられる方法は？」

○社会全体として科学的な根拠に基づいて判断し行動することがいかに大事かに気づかされる機会が多々ございます。

理系進路という観点では、選択肢3番「研究者の社会的地位向上（安定した生活）」が最も有効というお答えが出ました。これはまたとても興味深い結果だと思います。理系の

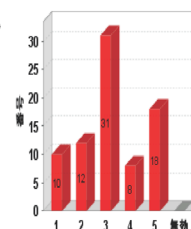
人を増やすためには、理系は楽しい、理系の研究者が思う存分生き生きと仕事をしている姿を見せなければいけないということを示しているかと思えます。そのためにはどのような方策があるのでしょうか。

○問7に対する答えでも、ある程度の方が性別を理由に進路の方向性、例えば理系に行け、文系に行けというようなことを中学校・高校の先生からアドバイスを受けられたみたいです。確かに私もちょうど高校生の女の子がいますが、やはり文系に行きなさいみたいなことを言われたと言っていました。中学・高校の先生方にももう少し、女性だから、男性だからというのではなくて、性別を抜きに、きちんとした根拠に基づいた指導をしていただくことが大事ではないかと私は思っています。

○今回、アンケートの結果で、何が大事かということでは「研究者の社会的地位向上」、3番が一番多かったわけです。特に女性が理系に進路を考えるという点で、私も女子中高生の授業をやっていることもありまして、先生や父兄や中高生本人たちと話すことがあります。先生が文系を勧めることがあっても、やはり本人は興味を持っていて、本人が「行きたい」と言っても、一番のネックは親御さんですね。親が反対してしまうと、もうどうに

問8. 女性の理系進路選択を促すために有効と考えられる方法は？

1. 研究者が理科の楽しさを伝える
2. 小中高でもっと自然科学を学ばせる
3. 研究者の社会的地位向上
(安定した生活)
4. 高校で文系と理系を分けない
5. 女性のPI(活躍している女性研究者/Role Model)の数を増やす



①

もならない。やはりここにも出ているように、皆さん、親の気持ちになっていらっしゃるのかと思います。子供には安定を求めるということで、理系に進学しても医歯薬に非常に人気があると聞いています。また、私も高校生の娘がいますので、実際、進路結果を見るとそのようになっています。ですから、それをすごく顕著に示しているかと思います。われわれの研究者の社会としてのひとつ問題があるのではないかと思います。

○最近いろいろなことが起きまして、先の見えない世の中になってきて、安定を求めるといって来ているという中で、今、男性、女性を問わず、若手の研究者の方は非常に不安を抱えて生きているという状況です。ですので、女性を増やすという意味でも、科学者全体の層を厚くするという意味でも、やはり若い人たちが夢を持てるような研究者の形をつくっていくことが非常に重要になってくるのではないかと思います。

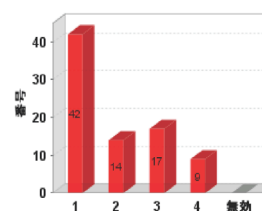
○30代をずっとポストで過ごす人が多分、ここの中にもいると思います。そんな不安定なことを続けていくためには、一方ではある意味で能天気でないといけない。しかし、安定という意味では、もちろんきちんとした就職先があるといいはず。だから、よく言われるように、PH.Dを持っている人が官僚とか都道府県庁に就職できるという道筋があれば、親も安定を求めるといって来れば、公務員になれるのだったら素晴らしいことだと思う人はたくさんいるだろうし、そういうこともぜひ必要かと思えます。

問9. 「夫婦研究者が同じ研究室に属する場合にどう思いますか？」

○気にならないという方が非常に多いので、すごいというのが私の印象です。そういう中でも、やはり嫌だ、どちらかという嫌だという方々も何人かいらっしゃいます。そういう方々について、問10の質問に移ります。

問9. 夫婦研究者が同じ研究室に属する場合にどう思いますか？

- 1. 気にならない
- 2. 絶対に嫌だ(PIでなくても)
- 3. どちらかがPIならば嫌だ
- 4. 良い事だと思う



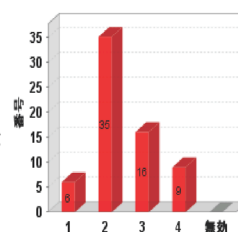
問10. 「夫婦研究者が同じ研究室に属すると嫌だと思ふ理由は？」

○「フェアでなくなる可能性がある」、高いですね。私も、一番そうじゃないかなと思っていました。

次に、今度は逆の視点から、夫婦研究者が同じ研究室に属しても良い・気にならないとお答えになった方々へのご質問です。

問10. 夫婦研究者が同じ研究室に属すると嫌だと思ふ理由は？

- 1. 監視の目が厳しくなる (ポスの愚痴が言えない等)
- 2. フェアでなくなる可能性がある
- 3. 夫婦だと互いに依存し合っていると思われて) 独立の研究者と見なされない
- 4. 何となく



問11. 「夫婦研究者が同じ研究室に属しても良い・気にならないと思ふ理由は？」

○1番と2番は、ご本人が夫婦研究者である場合だと思います。「たまたま夫婦だけで一緒に研究して悪い理由がない」が一番多い答えですね。

実は興味深いことに、こういう統計データ (女性研究者の配偶者の70%は研究者である)があります。女性が研究者の場合、そのパートナーである男性は7割ぐらいが研究者

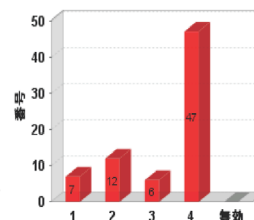
です。ですから、女性が研究者の場合、旦那が研究者である確率が非常に高いので、そういう場合、夫婦で同じラボにいらっしゃる確率もかなり高いと思います。

○こちらのデータにありますように、子育て中の女性研究者という立場から見ますと、同じラボにいないと研究が継続できないという場合も、もしかしたらあるかもしれません。女性研究者の配偶者は研究者が大多数であるという結果は、独立するまでの間、どういうパスを通るかを考えるときに避けて通れない、実は非常に重い問題であると思います。

○いろいろご意見があるかと思いますが、私の観点から言いますと大きく2つ挙げられると思います。1つは、周りの環境がすごく重要ではないか。夫婦研究者をどのように育てていくかは、その所属する研究所、大学・機関、そしてボス、周りの環境にすごく左右される。それは、恥ずかしながら私の経験的にもすごくラッキーな面ではあったのですが、あまり気にならないような環境をつくっていただいたという背景もありました。今となっては、周りの環境がすごく重要だったのではないかと感じます。

問11. 夫婦研究者が同じ研究室に属しても良い・気にならないと思う理由は？

1. 二人の方が生産性が上がる
2. 家庭生活を維持し易い
3. 性別でラボメンバーを差別しないことが期待できる
4. (たまたま夫婦だけで)一緒に研究して悪い理由がない



女性研究者の配偶者の70%は研究者である

- 有配偶者比率: 女性研究者は男性研究者に比べ低い
- 配偶者の職: 男性研究者の配偶者の過半数は専業主婦
女性研究者の配偶者の70%は研究者

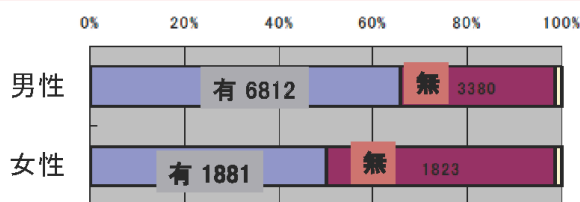


図 1.58 配偶者の有無

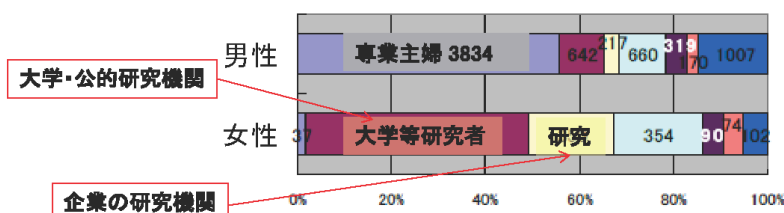


図 1.60 配偶者の職

もう 1 つは、最初のほうが受け身なのに対して能動的というか主観的ですが、実際に夫婦研究者自身の持っていき方も重要ではないか。非常に難しいと思いますが、たまたま同じラボになってしまった場合には、その「たまたま同じ」という雰囲気はどうやって出していくかは常に意識していかないと。それは意識する時点でまだまだなのかなと思いがちですが、できるだけ、たまたまそこにいるということで、家庭と研究をバチッと分けられるようになれるというのが、私たちというか、夫婦研究者のあるべき姿かなと感じております。

○周りの人にあまり気を遣わせないように生きていくことが大事なのかなと思うのと、あと、この結果を見ても、今の独身の女性とか男性もそうですが、理系の方と結婚される確率は結構高いわけですね。結婚された途端に同じ問題を抱えることになっていて、僕自身はやはりワーク・ライフ・バランスが大事だと思っています。やはり仕事がないから、父親は大阪で、母親は北海道だという非常に極端なパターンになるケースが研究者の場合、結構あります。そういう場合でも、なるべく近場で、両方の研究者が生き生きと研究をしながら子育てもできるような、そのバランスを考えていくことが重要ではないかと思っています。これからは家庭生活も大事にしながら進めていくことが重要ではないかと思えます。

○私が付け加えますと、夫婦研究者でやっていく場合に大事なことかなと思っていることは、夫婦がともに別々の研究者であることを周りの人が認識していただくことが大事ではないか。そのほうが、夫婦でやっていく場合に絶対やりやすいと思います。夫婦のどちらか、旦那さんが PI である場合もあれば、奥さんが PI である場合もあると思いますが、そういう場合でもとにかく両方とも、男女ともにいろいろな学会等でシンポジウムをオーガナイズするとか、スピーカーになるとか、そういう ヴィジビリティ (第 34 回年会の演題投稿者に対する女性比率) を上げていくことが大事ではないかと思っています。そういうことで夫婦研究者でもきちんとやっていけるようになるのではないかと思います。

○実は小さい子供がいると、片方は家で子守をしなければいけなくて、片方は学会に行くというので入れ替わりにならなければならぬような状態になっていて、やはり両方とも来てちゃんと発表できるような環境を学会としても、もっとよくする必要のあるのかもしれないと思います。

第34回年会の演題投稿者に対する女性比率

性別	学会員		一般演題	・シンポジウム&WS		
	合計	正会員	発表者	オーガナイザー	スピーカー	
女性	24. 8%	19. 6%	34. 6%	27. 7%	10. 8%	11. 5%

学会員全体と一般演題発表者の男女比は同等である一方、シンポジウム/WSのオーガナイザーやスピーカーは女性の割合が低く、正会員の女性率(19.6%)と比較してもその半分程度であった。しかし、昨年と比較すると、女性の割合が増えており、積極登用よびかけの効果が示唆された。

問 12. 「最近女性に有利な研究費や、女性のみ申請出来るポジション」

ンが増えてきています。これについてどう
思われますか？」

○女性の職が増えてきて、先ほども資料が
ありましたが、賞や助成金など、女性のみ
というのが増えてきたと感じつつあります。
それは、助成金だけではなくてポジション
に関してもそうでした、それについて少し
皆さま方のご意見をお聞かせ願いたいとい
うことで、この問いをつくりました。

結果は、とにかく、今は必要だろう、た
だ、ちょっと不公平ではないかという結果になりました。

○私、自分個人としては 3 番です。それは、私がまだ、この有利な研究費や、そういうこ
とでポジションを獲得したわけではない。だから、有利な研究費が取れるまで頑張っ
てほしいなと思っているわけではないのですけれども。実際問題、どこを見ましても、ポジ
ションに就いている女性がいる割合が低いことが統計として出ております。少しプロモー
ションしていかなければいけない。しかし一方で、先ほどから話題になっていますが、若手
の研究者の方の職がない。もしくは、ご夫婦で研究者の場合にそばで一緒に働けない。そ
れは同じラボではなくて同じ地域でということですね。

そういう問題も考えなければいけないということで、今の男女共同参画という問題が、
男女ということだけではなくて、ワーク・ライフ・バランスも含めた、非常に多岐にわた
ってきていて、みんなで考えていかなければいけないという状況になっていると考えてお
ります。

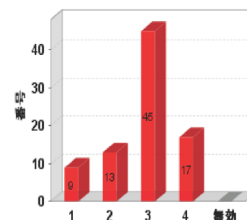
問 13. 「将来は PI になりたいと思いますか
／思っていましたか」

○私からは、女性研究者、特に PI がまだま
だ少ない。あるいは、問 8 で女性の理系の
進路選択を増やすために 2 番目に多かった
意見として、女性の PI の数を増やすことが
ありました。これは男女で答えが違うかも
しれませんが、この問 13 を問いかけたいと
思います。

実際には、私自身は正直に言うと 2 番が答えです。思いとしては研究はずっと続けてい
たいけれども、PI という、教授というポジションにあこがれているわけではないのですが、
少なくともやりたい研究を続けるためには PI になる必要があると感じています。1 番が多

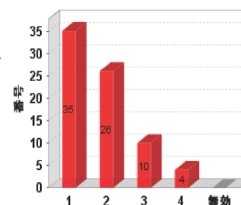
**問12. 最近女性に有利な研究費や、
女性のみ申請出来るポジションが増
えてきています。
これについてどう思われますか？**

1. 別にいいやん
2. 不公平である 良くない
3. 不公平であるが、今は必要
4. まだまだ少ない もっと推進を



**問13. 将来はPIになりたいと思いま
すか／思っていましたか？**

1. PIになりたいと思っている
(PIになった)
2. PIに必ずしもなりたくないが、
研究を続ける為になる必要が
あると思う
3. PIになりたいと思わない
4. PIになりたかったが、諦めた



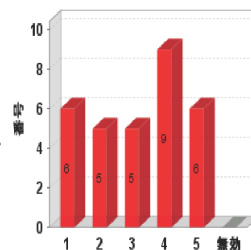
いですね。もしかしたら男女で答えが違うのかもしれないと思った理由は、身近な例で女性の研究者に聞くと、2番あるいは3番という答えを多く聞いたからです。

問 14. 「PI になりたいと思わない (あるいはなりたいたが諦めた) 方に伺います。その一番の理由は何でしょう？」

○先ほどの質問でPIになりたいと思わない、あるいは諦めたという意見があったかと思いますが、その一番の理由は何でしょうか。これは1つの答えではないかもしれませんが、最も強く共感できる場所がありましたら、それを選択してください。

問14. PIになりたいと思わない(あるいはなりたいたが諦めた)方に伺います。その一番の理由は何でしょう？

1. 研究費獲得やメンバー指導に自信がない
2. 出産などのライフイベントは不利なので、競争できる自信がない
3. 自分でテーマを生み出し続ける自信がない
4. 実験が好きなのでずっと実験をしたい
5. ポスを見て魅力的な立場と思えない



割と平均的にいきましたが、5番の答えもまあまあ多いことは、ちょっとショックの先生も多いかと思います。一番多いのは、実験を続けたい、なので特にPIを目指したいという気持ちがないということかもしれません。特に男女関係なく、PIを目指すことはもちろんいろいろな不安が付きまとうことだとも思います。私自身もまだPIになりきっているわけではないですが、PIにならないと研究を続けられないのではないかと腹をくくったというか、そう決めて、その道を歩き出してみると、例えば研究チームをつくることをやって

科学技術系分野では、女性のPIが少ない

役職には男女差が大きくみられ、職位が高いほど女性割合が低い

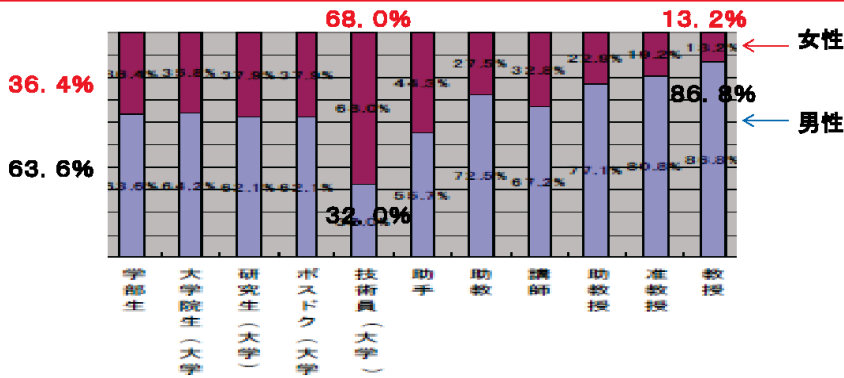


図 1.19 役職ごとの男女比

PI	教授、准教授、助教授、講師
	理事、ユニット長、グループ長、主任研究員
NPI	NPI 任無 常勤(任期無し)の 助教、助手、研究員、技術員
	NPI 任付 常勤(任期付き)および非常勤の 助教、助手、研究員、技術員
	ポスドク ポスドク
学生	大学院生、学部生、研究生
企業	管理職 取締役、事業部長、部長、課長
	一般職 主任、一般社員
無職	無職

みると、それまでと違ったおもしろさがあることをわかったことも事実です。単に自信がないという理由でPIを目指さない方がいるとしたら、もう少し踏み出してほしいなどは思っております。

次の資料（科学技術系分野では、女性PIが少ない）に進みます。女性のPI、教授はまだ割合が少ない一方で、技術員という実験・研究の上で補佐的な役職に関しては女性のほうが多いわけです。これはもしかしたら、実験をずっと続けていたいというポジティブな意識で技術員を選択しているという面もあるかと思います。実際、こういう職も非常に重要で、必ずしも全員がPIを目指して研究をするということは必要ないと思います。大事なのは、こういうずっと研究をしていくという立場での研究者の職を安定化させることもあるかと思います。例えばポストクの年限をあまりつくらない、ずっとポストクでいられるような可能性もつくる。あるいは、今、技術員という職のパーマネントな職が非常に少ないと思いますが、せめて再雇用がもっと簡単にできて、継続的にプロジェクトに参画できることも重要ではないかと思います。

○思ったよりも自信があって、なりたいという方が多かったですのですが、先生から「私も2番でした」と聞いて、私も2番で、実験だけやっていたら、それが一番楽しくていいと思うのですが、必要に迫られてやって、今は研究グループをつくって、まだPIではありませんが、動かしています。

そうすると、ここにはPIの方は結構いらっしゃるのですが、チャンスを与えられればできることがわかって、その楽しさがわかることがあります。ただし、「やりたい人」と言われて積極的に手を挙げるかといったら、そこがマイノリティのマイノリティたるゆえんでして、やはり数が少ないと、「あの人ができるのだから、私もできるわ」というのは、周りにいろいろとモデルがないこともあって、かなり不安です。一方、男性が全員自信があるかといったら、絶対そういうことではないと思います。ですから、PIの先生方、できるだけチャンスをいただきたい。絶対に責任を持ってできる方ばかりだと思います。その辺、よろしくお願ひしたいと思います。

○私も2番でした。自信がなくて、PIになるイメージが湧かないと思っていたのですが、よく役割が人をつくると申しますが、なってみると意外とできるということを若い方たちにすごく伝えたいと思います。私の周りにも、とてもできる若い女性がたくさんいて、独立してみれば絶対にできるのに、自信がないので引っ込んでしまうという人が本当に多いのですね。皆さんがおっしゃるようにロールモデルがあれば女性の活躍を当たり前だと思えますし、また、責任を持たせてみるとか、ヴィジビリティを上げてみるとか、そういう立場になってみると意外とできるということは必ずあると思うので、そういう方向でいけたら本当にいいと思います。

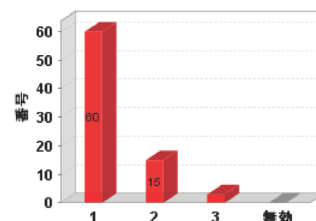
問 15. 「今後も男女共同参画の活動は必要だと思いますか？」

○非常に重要な質問です。第1部の講演で、これまでの成果をご発表いただいたのですが、問15では「今後も男女共同参画の活動は必要だと思いますか?」、非常に究極的な質問になってきます。皆さん、押しただけですか。

3番が出たら非常に衝撃ですね。やはり、これからも必要だというのが大多数のご意見だと思います。

問15. 今後も男女共同参画の活動は必要だと思いますか?

1. 必要
2. どちらでもよい
3. 不必要



①

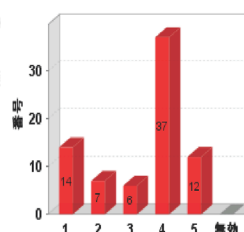
問16. 「男女共同参画の活動はどのような視点で取り組むのが望ましいですか?」

○これまで、非常に大きな成果を上げてまいりましたが、今後次のステージに向かうためにどこを重点的に強化したらよろしいのかという点で、選択肢の中でどれが重要視されるべきかを皆さんにお答えいただきたいと思えます。

4番、やはりワーク・ライフ・バランスが非常に重要視されている感じがありますね。5番の「その他」。この中では、研究と家庭生活の両立も重要なポイントとして挙げられているのですが、もし「その他」と押された方で、この場でこういう点でもっと強化して話合っしてほしいということ、今後こういうところをやっていったらいいということがあれば、ご意見を伺いたいのですが、会場からどなたか、いらっしゃいませんか。

問16. 男女共同参画の活動はどのような視点で取り組むのが望ましいですか?

1. 女性研究者の研究費・ポジションの優遇、表彰などによるエンカレッジ
2. 女子学生に対する科学教育の充実
3. 学会における女性発表者の増加
4. 研究と家庭生活の両立
5. その他



①

○女性 (フロア) 私は、アメリカの大学、ユニバシティー・オブ・カリフォルニアの教授です。日本で育ったのですが、すいません、日本語があまりできないのですが。一つ課題として出てこなかったことで、女性の学生の教育、中学生と高校生に科学の教育をすることがありましたが、日本の小学校や中学校ではどういことをやって女性と男性がイコールだという考えをエンカレッジするようなことはあるのでしょうか。それは、特に何かをする、試験をするとかいうことではないのですが、小さいときからそういう考え方で、女性と男性がイーブンでやっていくという、社会がそういうふうに見るところも大事だと思うのです。このごろ、小学校とか中学校ではどういことを文部科学省がやっているのかよくわかりませんが、その辺を考えたらどうかと思いました。

○私は文部科学省がどのような政策をとっているかはわかりませんが、親として子供と一緒に学校教育を見てきた上での感じですが、小学校では男女差なくきっちり教育されていて、先生も平等に教育されていると思います。ただ、感じとしては、高等学校辺りにな

ってきて、自分たちで自主的に何かをさせるとなったときに、なぜかリーダーは男子学生がなってしまうという傾向が強いように思います。ですから、教育現場としては平等に扱う、特に道德教育などではそのようには教えていますが、学校という社会の中でどうかというと、そこではリーダーは男性という形ができてしまっているのが現状ではないかと感じます。

○女性（フロア） この男女共同参画はすごく素晴らしい取組みだと思います。今回、そのアンケートを見て思ったことは、やはりここに参加しているという時点でかなり意識が高い人が多い、その中でのアンケート結果だと思います。かなりバイアスは掛かっているだろうなと思います。結果的にはすごく理想的だなと思われることも多かったです。

私が思ったのは、女性が頑張るといって、その意識改革も大事ですが、やはり男性側の意識改革、先ほど塩見先生も第二部の講演でおっしゃいましたが、潜在的な差別がある、それがかなり残っていると私は感じています。全体的にそう感じます。

先ほど、配偶者の職業のアンケートがありました。女性の研究者の配偶者は研究者が多いということでしたが、逆に男性の研究者の配偶者は半分以上が専業主婦。そのような方が例えばPIとなられたときに、育ってくる下の女性研究者、男性研究者が家庭を持ったときに、本当にそれに理解を示せるかということに私はすごく疑問を感じます。ただ、それは専業主婦の方が悪いとか言っているのではなくて、それぞれの家庭があっというと思えますが、やはりそういう方々もしっかりと考えていく必要があるのではないかと思います。

○男性（フロア） この会には何回か過去から参加させていただいています。今日、数字で出されたのですが、一般の発表は女性が多いが、やはりシンポジウムでは少ないとか、そういうことがやはり実数で出てくるとちょっとショックな気がします。恐らくこういう取組みで女性を何とかエンカレッジしようということは、それはそうですが、きっとそういう社会になったら、男性の研究者も良くなるので、もっとみんな、こういうところに参加してほしいなと私は思います。

これは提案ですが、これはほかのセッションとかぶらないようにやるべきではないでしょうか。これは、大学でも一つ大きな課題だと思います。ですので、そうしてもらえたらと思います。

○男性（フロア） 逆の主張になってしまうかもしれません。先ほどのアンケート結果で、オーガナイザーをしている女性が、一般講演などに対しても少ない。あくまで自分の周りのケースを見ていて思うのですが、いわゆるオーガナイジングであったり、学会、特に国際学会などの幹事であったり、これは雑用の部類に入ってくるかもしれないのですが、か

えってそういうところに女性をどんどん入れてしまうことによって、逆に研究が進まなくなるということもあるのではないか。

例えば分子生物学会以外の学会で女性の比率が多い。僕の知っている人ですが、やはり小さい学会ほど評議員に入ってくる女性の割合が少なくなる。そうすると、女性も幹事とかそういう活動に入れなければいけないから、どんどん雑用が押しつけられてしまう。その人は子供が産まれてということもあって、非常に大変そうだったなという印象がありました。

いわゆるオーガナイズングを積極的に女性に押しつけるというのは失礼な言い方ですが、それをさせることによって、かえって逆効果になることはないでしょうか。女性の観点から見てどうでしょうか。

○本当に仰る通りでして、何かしらコミッティーにおいて、必ず女性を何割入れなければならないという場合、立場上どうしても、となることが多い。そうしますと、本来研究に割かなければいけないと自分では思っている、ほかの男性の研究者よりもそのような役割に割かなければいけない時間が増えてきます。このような活動が逆に足を引っ張ることもあり得るという点は全く仰る通りです。しかしそれをどうしたらいいかはまた難しいところだと思います。

○男性（フロア） ちょっと言いたかったことは、このアンケートだけで一気にというか。もちろんオーガナイズングをすることはメリットも大きいと思うので、そういう機会を増やすことは大事だと思いますが、ほかの学会並みに、分子生物学会は人が多いのでそれほどでもないですが、あまり女性にそういう役割を無理に押しつけようとするのはまずいかもしれない。

○集中せずにいろいろな方に分散させるのであれば多分ポジティブな要素のほうが大きい。

○男性（フロア） そうですね、そう思ったということだけでした。

○男性（フロア） すいません、先ほどの奥さんとだんなさんが 2 人とも研究者だと学会へ一緒に来られないという話で、この分子生物学会には託児所とかも設けられていると思います。でも、その条件を見ると、お昼ご飯時には戻らなければいけない、有料であるとか、時間が結構タイトであるとか。子供のいる女性研究者もしくは男性研究者が子供を全員連れてきたら、多分キャパシティオーバーになるというところもあると思います。分子生物学会のような、かなり大きくて、予算の出そうな学会は無料にするとか、キャパを増やすとか、そういうことからまずやっていって、参加できる、最低限参加できないことに

はディスカッションもできないので、そういうことをだんだんやっていくことが必要ではないかと思いました。

○女性（フロア） 実は、私は企業で研究をしているのですが、パートナーは大学機関で研究をしています。今日、この学会にも来ているのですが、別のお話を聞きに行っているため、この場には来ておりません。ですので、先ほどのお話にもありましたが、全員が参加できるような機会をぜひ一度つくっていただいて、一緒に参加できたらよかったなということが1点あります。

まだ、私は20代で、彼も30代前半で、若手の研究者同士という部分があって、やはり任期とか、お互い今後近くに住めないかもしれないとか、育児の問題とかも本当に抱えている真っ最中というところですよ。女性を支援するというだけではなくて、逆に男性の研究者が育児をするということもあると思うのですよ、私の中で。ですので、女性だけを支援していくのではなくて男性を支援していくという形で、今後そういう動きがあってもいいのではないかと思います。

○男性（フロア） ちょっとすいません、私が割り込んで。男女共同参画はやはり長期戦なので、まずこの男女共同参画では最初のステップで数値目標をつくって、今度はリーダーシップでやって、3番目は長期的に、その次の世代をどうやって。結局子供のときにどういう環境で育ったかが決定的で、私の場合は母子家庭で母親が苦勞していたので女性に対する理解があるという、その経験知の問題なんですよ。だから、第3のステップ、ビジョンとしては、その次の世代にどうやって環境をつくっていくか。僕が言っているのは「おじさんと戦ってはいけない」、おじさんカルチャーは無意味です。だから、そんなエネルギーを使うよりも次世代にエネルギーを使えということが、僕の言っていることです。やはり分子生物学会としては一歩進んでいただいて、今戦うのではなくて、やはり長期的ビジョンで、その次の世代で、「今に見ている」という精神でやらないと。

僕は少年サッカーをやっていますが、僕らのときはすでにお母さんをまず教育するのですよね。お母さんが熱心になれば子供は必ず来るので、それをやって今のサッカーは強くなっているのです。その次の世代を見据えたビジョンを持って、皆さん、労力を使ってきたのですよ。だから、男女共同参画も長期ビジョンに立って、その次の世代に懸ける。今のおじさんと戦うエネルギーがあるのならば、必ずや次代に使ったほうが良いというのが私のアドバイスです。

○女性（フロア） 先ほど、オーガナイザーとかを女性に押しつけると雑用が増えてしまって、かえって逆になるのではないかということでした。確かにその面はたくさんあるのですが、でも、だからといって「かわいそうだから、今はあの人は外しておこう」ということをせずに、ぜひ取り込んでほしいと思います。女性を取り込んで、その上で助けてあ

げてほしい。そうでないと、今は子育てが大変だからといって女性が参加しないでいると、どんどん遅れてしまうというか、置いていかれてしまうのですね。人との関係も、人的なネットワークを失うことなので、ぜひそれは、学会の雑用もシンポジウムのオーガナイズの役割も女性を含めていただいて、それこそ雑用の部分を周りの方たちがサポートしながら入れていただきたいと思います。

そのことでヴィジビリティも上がるし、その人の学会の中での人のつながりも増えていくし、大学の中でもそうだと思います。すべての委員会に女性をとくと、男性は全学の委員会で2つぐらいなのに、女性は8つも9つもなるのですが、それでもそれを支えていかなければ次には伝えられない。だからこそ、増やさなければいけないという意識を皆さんが持っていただければと思います。

○男性（フロア） すいません、最後にひと言だけ言わせていただきたい。男女共同参画の活動自体が女性研究者にすごい負担になっていると思うのですよ、現状で。それを何とかしていかなければいけないという問題がある。特に私も動物学会で男女共同参画に関わっているのですが、女性研究者、PI ではない、特に任期制の教員とか研究員という方にもものすごく共同参画の活動が依存している部分がある。そこを学会を挙げて何とか変えていっていただきたいと私は思います。

○時間が大きく超過してしまいましたので、これで終わりにしたいと思います。非常にいろいろな意見、大変貴重なご意見をいただきました。これを基にまた今後の方針を考えていきたいと思います。特に、皆さまお一人お一人のお考えがあると思いますので、アンケートに是非、今後の方向性についてひと言ふた言でもお書きください。それがまた今後につながりますので、是非ともよろしく願いいたします。今日は長い時間ご参加をありがとうございました。

（終了）